

A photograph of a red flag on a bamboo pole in a landscape with a river and mountains. The flag is on the left side of the frame, and the bamboo pole is vertical. The background shows a river in the foreground, a grassy field, and a large, forested mountain in the distance under a blue sky with scattered white clouds.

ARTIST IN RESIDENCE  
IN NOBEOKA  
2013

2013.10.11-27  
ARTIST IN RESIDENCE  
IN NOBEOKA

目次

目次	1
『地域力』を見直す	2
『風土と制作』	4
木名瀬 薫	6
石井夏実	10
丸山喬平	14
石川洋樹	18
石倉未那美	20
稲葉星舟	24
ワークショップ	28
作家略歴	30
『潜在能力』	31
謝辞	32

## 『地域力』を見直す

2002年にスタートした「水辺から文化の里づくり」事業に、アーティスト・イン・レジデンスを取り入れてちょうど10年目となった。今年は東京芸大の院生5名と金沢美大の4年生1名、計6名という大人数で宿泊場所に地域内の借家を一ヶ月だけ借り上げ、6名で共同生活をしてもらったのも初めてである。

芸大の学生達は、林武史先生の引率で、9月に下見を行い、地域をある程度理解した上で、10月26、27日の「東海さるく」という地域資源も活用したスタンプラリーで作品を発表すべく、順次延岡にやって来た。同時に台風も立て続けに襲来し、飛行機のダイヤにも翻弄される事となった。

この地で、アーティスト・イン・レジデンスがスタートしたのは、12年前のワークショップがきっかけである。「リバーパル五ヶ瀬川」の管理運営の委託を受けて、毎日通う内に、この地域には「人が集まって住む」ための迷路のような昔の町型が残ることに気付いた。舟運基地だった名残も多い。これを活かさないかと開催したワークショップでの3つの提案の内の一つが東京画廊の山本豊津氏が中心にまとめたアートを取り入れた町づくりマップ。1年の準備のもと、山本豊津氏の紹介で美術家の吉田暁子さんが訪れ、加藤さんの借家を借りて「延岡の似話」という作品を作ってくれた。

その折、吉田さんがこの地域を気に入り「土井さん、私、来年は文化庁の派遣事業で1年間ニューヨークに行くので、そこで各国政府の奨学金を受けている人が所属するスタジオから、誰か探して送り込んであげようか」という話になり、翌年からメキシコ人ウンベルト・デュカ、キューバ人リセット・カスティリヨ、中国人幡星磊（パン・シンレイ）、香港の蛙王（フログ・キング）、台湾系アメリカ人フォン・シーチェ、シンガポール系アメリカ人ミシェル・コンと続いて来た。

その間、カンザス大学で5年間アートを学んだ苅安まみ子さんが、通訳とアーティストの支援をしてくれていたが、札幌に行ったので、一昨年は大平龍一君、昨年は吉田暁子さんが教え始めた金沢美大の院生、神谷麻美さんと日本人になっていた。

今年の6名は、男女3名ずつ。男性は主に室内での作品、女性は果敢に自然に挑み、アースワークのような作品を作ろうとして奮闘したが、立て続けの台風にも翻弄され、強風や豪雨、川の増水、野外でのスケール感など、自然に立ち向かう作品を作ることの厳しい洗礼も受けた。

また、アイデアを実際の作品にするための手順や技術については、地元の方から沢山の応援を受けた。具体的には、公民館の壁に下地を作る作業をしてもらった大

工さん。写真をシートに印刷してくれた看板屋さん。田圃での作品のために田圃の提供を交渉してくれた人。田圃に印刷したシートを張るために鋼管の手配や建方のアイデアと実際の作業も手伝ってくれた方達。公民館に集まってQRコードの作品のためのスチレンボードを3センチ角にひたすら切り続けてくれた方達。作品に誘導するための旗やスクリーンのため、ミシンを持参して縫ってくれた人。そしてビデオ作品のため出演交渉をしてくれた人や、その作品の上映のため、プロ仕様の100インチと120インチの裏から写すスクリーンや、やはりプロ仕様のDVDプレーヤーを持参して、リハーサルから参加して機材のプロとして粘り強く的確なアドバイスをして頂いた人など数え上げたらきりが無い。

アイデアを具体化するには様々な知恵や技術が必要だ。それは生活の中から体得される物が多い。学生がこつこつとスチレンボードを切っている横で、独自の定規を作って、3倍の早さで切っている地元の人達を見たり、強風でバサバサにちぎれた写真のシートを、ビニールハウス修理用のテープを持参して修理してくれている光景を見ると、今回の学生の作品は、地域の応援無くして出来上がらなかったと痛感している。

今、改めて「地域力」という言葉をかみしめ、「地域力」を誇らしく思っている。

古来日本では、農業や地域を維持する土木工事などは地域の人が力を合わせて取り組む風土があったし、自分の手を使って暮らしを紡ぎだす事にも長けていた。その中で、地域のコミュニケーションも育まれて来たのである。

今、そういう場が少なくなっている中で、学生にそんな場を提供してもらい、地域の中の新しいコミュニケーションの手法を気付かせてもらったような気もしている。

NPO 法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク  
リバーパル館長  
土井裕子

## 『風土と制作』

私がリバーパル五ヶ瀬のアーティスト・イン・レジデンスに係わって十年の歳月が経ちました。

数多くのアーティストに参加していただきましたが、このたび初めて美術大学とのコラボレーションを実現することが出来ました。東京藝術大学彫刻科の林武史研究室の修士生と金沢美術工芸大学美術科吉田暁子研究室の学部生の計六名です。六名は東海東地区の五ヶ所に作品を設置しました。都市空間と異なる空間で悪戦苦闘していますが、見応えのある作品が住民や訪れる人々に好感を抱かせました。次にそれぞれの作品に関して私の雑感を記します。

石井夏実君の作品「つつむ」

素材をその自然性を生かして使う場合は、作品が設置される環境との関係を慎重に考えて下さい。「つつむ」は細い竹を組んで制作され、都市の人工的な環境ではその繊細さが生かされませんが、自然性の情報が多いこの場所では表現力が弱くなってしまいます。作品は観る人の想像力を超えていなければなりません。人の営みは自然の前で非力であることを強調するために、細くて弱い素材の特徴をさらに弱く表現しても良かったと思います。

石倉未那美君の作品「帰路」

展示の当日は強風のため計画どおり実現できず残念でした。誰が帰路に着くのか？そして観る人がこの作品で「自分の帰る所」を思い出す契機となるのか？個人の「思い」を喚起させるためには、作品の設置場所とサイズを考える余地がまだあると思います。写真をアートの素材とする場合、撮られたイメージを超える表現としなければなりません。絵画との違いなど写真の芸術としての意味を考えて作品に生かして下さい。

木名瀬薫君の作品「葦原を通る」

視覚的情報であった美術に、身体そのものを参加させる作品は環境を巻き込む表現には適しています。空間には身体と係わる歴史的意味があります。たとえば神が降りる場所を指定する結果や、茶道や華道のように身体の所作が行なわれる場所などです。そして子供の頃に自分の空間を秘して作った快感など心と空間の関係など制作にあたって考えなければならないことは山ほどあります。

稲葉星舟君の作品「accessgate」

アートは仮想空間そのものです。アーティストは自身がつくる仮想空間へ観る人の心を誘うテクニックを持たなければなりません。現代の情報化社会では、現実と仮想の境が曖昧になり世界全体がディズニーランド化しています。生活が演劇的に

なり都市を舞台として演じているような錯覚に落ちて自分を失いがちになります。QRコードは社会に存在する全ての物を記号化し商品の海にぶちこむシステムとして創られました。便利とは何か！スマートフォンを使う自分とは何か？そういう批評的なコンセプトを表現に含ませなければ作品を見せるファイルでしかありません。

丸山喬平君の作品「あこがれの記憶」

テレビが普及される以前は日本国中のいたるところに恋島のような映画の劇場がありました。フィクションである映画は村人に日常の生活を一時忘れさせ、外の世界を知る窓の役割を果たしていました。テレビの普及により恋島のシアターは映画とともにコミュニケーションの場所でなくなります。丸山君の作品は村の人たちに昔の恋島シアターを思い出させるにはポスターの数が足りなかった。アートは異物として存在するのが本義で、過剰でなければ異物にならず、コミュニケーションを喚起させません。着眼点は良いので、表現にまでもう少し深く考えてほしかった。

石川洋樹君の作品「恋の島」

恋島の地名に関心を持ったことが勝因だと思います。どの土地にも必らず暮しの由縁があり、時間を遡ることで人の存在理由を解き明かすのもアートの重要な一面です。なぜ画家は富士を描くのか？ただ美しいだけではない、何世代もの人々が見続けてきたからです。またアーティストは折口信夫が言う「まれびと」の役割を担っています。まれびとの石川君だからこそ人々は語ったのです。その語りを映像として映画館で上映して作品としました。人々の心のなかに外があり、皆が憧れた外はもう現代社会にはありません。もう一つ重要なのは椅子に座らせたことです。椅子は畳と違い個を確定させる道具なので、個人主義の原点が椅子とすると民主主義の原点が皆が共通に使う大きなテーブルになるのかななどと考えたりします。椅子の扱いにもう少し注意を向けてもらえばパーフェクトでした。

石川洋樹 + 丸山喬平の共作「シアター恋島」

人は集まって人になります。現代社会の抱える幼児性は集まることを忘れたからです。人は様々な人と会って強くなり自分をつくります。便利な社会は集まりを疎外し人々を孤立させました。二人の作品はコンセプトとテーマが場所に一致して秀逸な作品となりました。

それぞれに的が外れているかもしれませんが、ご容赦お願いします。

東京画廊代表  
山本 豊津



## 友内川河口付近の葦原

リバーパル五ヶ瀬川の目の前に広がる葦原。葦の高さは人の背丈ほどもある。木名瀬は滞在中に葦をかき分けながら葦原の中を歩き進んだ体験から、その時に感じた体感や感覚を頼りに、葦原の中に道と人がすっぽり隠れるような空間をつくり、鑑賞者が実際にその中を通ることのできる作品を制作した。

## 葦原を通る Walk along Reed bed

木名瀬 薫 Kaoru Kinase

葦 竹 砂 麻ひも 赤い布 サイズ可変



自分の背丈ほどもある葦の中をかき分けながら進んでいくと周りが見えず、自分がどこにいて、どこに向かっているのかわからない、はっきりしない感覚になった。気づいたらどこか知らない場所に出してしまうのではないか。でも、おそらくすぐ隣にあるであろう歩道のほうから通る人の声が聞こえる。日常とすごく近い場所のはずなのに日常とは違う場所に感じられた。

## 二ツ島町 寺島地区 北川、水門付近

リバーパル五ヶ瀬川から歩いて10分ほど、その場所は北川沿いの土手をおりた所にある。

川から海につながっていく様が見渡せる、気持ちのよいところだ。

対岸には山、遠くには海と船が見える。その上を鳶が飛んでいる。

バシャッ 魚がはねる音が時折聞こえる。延岡の風土を近くに感じられる場所だった。



## つつむ Tsutsumu

石井 夏実 Natsumi Ishii

若竹 麻ひも 稲穂 H250×W250×D250 (cm)



若竹を組み、大きな笹のような鳥の巣のような形ができた。

その中に今年とれた稲穂が入っている。

滞在中、子供たちと一緒に稲刈りをした。

その体験がこの作品の出発点となった。

二年竹の鮮やかな黄色は黄金色の田んぼの色にも似ている気がした。

実り豊かなこの場所で、この作品は土地と一体となりながら、実りをつつみ、風土につつまれる。







**恋島避難所兼公民館** シアター恋島 石川洋樹 + 丸山喬平

かつて、恋島避難所兼公民館は恋島地区の住民にむけて映画や1ヶ月のスパンで芝居を公演しにくる劇団が来て住民全員が集う憩いの場であったという話を聞いた。現在は婦人会の会合や、敬老会などで使用され、洪水時の避難所でもある。石川と丸山はこの公民館を二人の作品、外と内で展開しこの公民館を2日間だけオープンするシアター恋島に作り替えた。

## あこがれの記憶 Fiction of love

丸山喬平 Kyohei Maruyama

木材 布 油性インク H360×W1680(cm)



恋島ならではの創作の昔話が、その時代その時代の人々によって少しずつ姿を変えながらもこの地域を形作っているもののひとつに感じ、目には見えないが地域への愛情によって確かに流れている恋島の一面を、恋島の人々の憩いの場であるこの建物の表面に浮かび上がらせるイメージが浮かんだ。

作品を見たとき多くの方に今昔のことに思いを馳せ、楽しんでもらえればと考え、恋や愛を謳った映画の俳優のイメージを外壁にコラージュし、フィクションにより作られた恋島の一面を表現した。

# 恋の島 Island of love

石川 洋樹 Hiroki Ishikawa

2 channel HD video installation 11min 40sec



この作品を作り終えた後、結局私が一番したかった事は『恋愛相談』に近いと感じています。映像作品の主体は恋島の方達にありましたが、個々が経験した恋愛をインタビューして回るという行為は、私自身がポジティブなエネルギーを欲していたからだと気がつきました。そして、今、私は『これでいいのだ』と素直に思えるのです。



## 無鹿町地区

広大な田圃と一本道の先に小さい集落がある。

昼間は遠くの山々が見え、きもちのよい空が広がる。

鳥や農作業をする人が見える。

夜になると寂しく街灯がつくだけで山々は大きな影になる。

▶ 家族の待つ家々に帰る中学生が、自転車に乗って駆けぬけていく。

## back to home 【帰路】 しろ

石倉未那美 Minami Ishikura

写真 H300×W360 (cm) サイズ可変

陽が落ちる、夜が来る  
少し手前の帰り道、  
遠くの明かりがきわだつ。

ただ広い無鹿の田圃を突っ切る道路を  
帰るひとの見る景色を  
ただ広い無鹿の田圃の真ん中に  
掲示する、  
真直ぐの道の見慣れた景色のなかに  
突然あらわれる黒い影は、  
よく見ると見慣れた帰り道。



写真はすべて無鹿町周辺で撮った。

夕暮れから夜にかけての時間帯、車のヘッドライト、川面に映る明かり、  
少ない街灯、遠くに見える街の灯、

暗いなか写真を撮っていたらママチャリに跨がりヘルメットをかぶった部活帰りの  
中学生に「こんばんは」と挨拶をされた。

田圃に展示をするのに、地主の方にとってどれだけ田圃が尊いものなのか  
知らなかったわたしは説教をされた。

地元のおじさんや青年に天気のことや田圃や道具の扱い方やなにやらなにまで  
教えてもらった。

雨風の吹き荒れるなか、稲刈りを終えた田圃は再び水田になった。

知っているようで知らないことはたくさんあった。

back to home

【帰路】 しろ

家にかえる、その道。



## 栗野名公民館

栗野名は街の主要な道路に面しており、人通りの多い地域である。住民には延岡市の主要な産業である科学工業の従事者OBも多い。「東海さるく」会期中、栗野名公民館では地域住民によってぜんざいが振る舞われており、談笑しながらゆったりと過ごせるアットホームな空間となっていた。

## アクセスゲート Accessgate

稲葉 星舟 Seishu Inaba

カラー発泡スチレンボード 他 H153 × W153 (cm)



スマートフォンでのマップ表示イメージ

『accessgate』は巨大なQRコードの作品です。コードをスマートフォンで読み取ると、ウェブ上の東海地域周辺をおおまかに表したマップへと繋がります。マップは実物のコードと同じく1.5×1.5mのスケールでスマートフォン画面上に展開します。以前からシリーズで展開していたこの作品ですが、今回は東海編と題して地域との関連を意識したものとなりました。私たちのような若い世代や慣れた人にとってはこの白黒のパターンは見ればすぐに「QRコード」とであると認識できるものですが、そうでない人には不可解な模様でしかありません。今回の滞在制作、展示においてはその個人間の差異が特に強調されたように思います。しかし、「分からなかった人」に対してスマートフォンを所持している人が画像を呈示して解説したりと、この場であるからこそそのコミュニケーションが発生することもありました。その意味では、却って面白い試みができたのではないのでしょうか。



制作にあたっては、栗野名地区の多くの方にお手伝いいただきました。実地的な面で貴重なご助言をたくさんいただき、何とか完成までこぎつける事ができました。

栗野名の皆様、ありがとうございました。

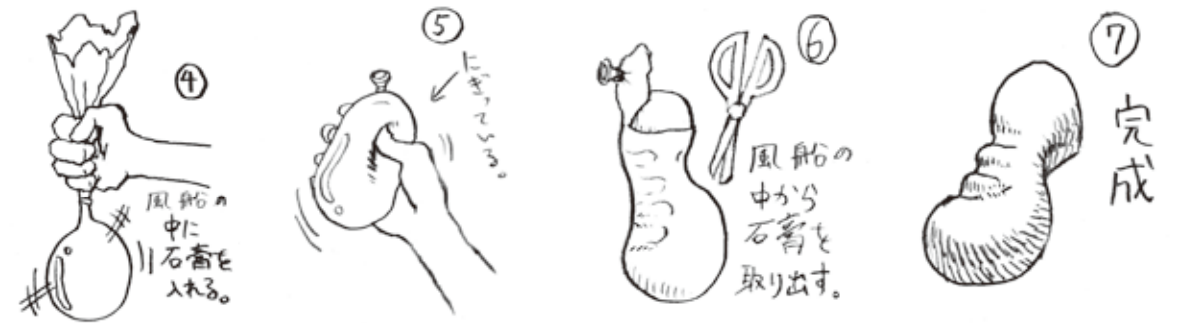


# ワークショップ Workshop

普段あまり触れることのない素材を知ってもらおうと石膏を使ったワークショップを行った。水で溶いた石膏を小さい子どもでも扱いやすいように風船の中に入れてその口を閉じ、手で握ったり、指で押さえたりしてカタチを変形させてもらう。手で握ると普段感じることのできない自分の手の中のカタチがとれたりする。そのようにして自分の手の中で風船をぐにぐに变形させる。すると、始めはとろとろに柔らかかった石膏が手の中でだんだん固くなり、固くなっていくにつれて石膏がだんだん温かくなっていく変化を一人一人の手の中で感じてもらった。



## 制作手順





## 作家略歴



木名瀬 薫  
Kaoru Kinase

1989 埼玉県生まれ  
2012 アート亀山（三重県亀山市東町商店街 / 三重）  
多摩美術大学工芸学科卒業制作展 2013 ひてひと  
（スパイラルガーデン / 東京）  
2013 多摩美術大学美術学部工芸学科陶専攻卒業  
現在 東京藝術大学 大学院美術研究科 1年在籍



丸山 喬平  
Kyohei Maruyama

1987 神奈川県生まれ  
2009 東京藝術大学美術学部彫刻科入学  
2013 東京藝術大学美術学部彫刻科卒業  
人ってなんだろう（Gallery KINGYO / 東京）  
現在 東京藝術大学 大学院美術研究科 1年在籍



石倉 未那美  
Minami Ishikura

1987 東京都品川生まれ  
2012 『拝借借景』（茨城）  
2013 東京藝術大学美術学部彫刻科卒業  
KOSHIKI ART PROJECT（鹿児島）  
現在 東京藝術大学 大学院美術研究科 1年在籍



石井 夏実  
Natsumi Ishii

1988 埼玉県生まれ  
2012 東京藝術大学美術学部彫刻科卒業  
2013 藤沢今昔まちなかアートめぐり 2013（神奈川）  
メタモリアル。（目黒区美術館区民ギャラリー / 東京）  
現在 東京藝術大学 大学院美術研究科 2年在籍



石川 洋樹  
Hiroki Ishikawa

1987 茨城県生まれ  
2011 東京藝術大学美術学部彫刻科卒業  
金沢現代彫刻展（しいのき迎賓館 / 金沢）  
走って流して山ができた（梅の湯 / 東京）  
2012 ロンドンに滞在  
現在 東京藝術大学 大学院美術研究科 2年在籍



稲葉 星舟  
Seishu Inaba

1992 福岡県久留米市生まれ  
2012 ヤマウチショウタとアートユニット「astro-nuts」結成  
オープンスタジオ石引（石引アートベース / 金沢）  
神通峡トリエンナーレ（旧富山市立小羽小学校校舎 / 富山）  
2013 シムカップアートキャンプ 2013（占冠村 / 北海道）  
現在 金沢美術工芸大学美術科日本画専攻先端表現コース在籍

## 『潜在能力』

私は、宮城県延岡市にあるリバーパル五ヶ瀬川館長の土井裕子さんからの誘いで、3月にこの地を初めて訪れた。土井さんとともに延岡市の名所旧跡を短時間で見て回り、工場を中心に栄えてきた地方といった印象をまず持った。しかし、今回のアート・イン・レジデンスが行われる、リバーパル五ヶ瀬川周辺を自転車で一日かけて見て回ってみると、俄然勇気が出てきた。なぜならそこには昔、この地が船着き場として栄えた名残や、汽水域によるいろいろな動植物の生息環境など、この地に生活した人間の記憶と静かに流れる自然の時間を堪能できたからである。それは、私の研究室5名の大学院生が「東海さるく」のアート・イン・レジデンスに参加することで得る経験は、彼らにとって今後の活動への財産となると確信したからである。

10月25日の朝、台風の影響で雨風が吹き荒れるリバーパル五ヶ瀬川で約2週間ぶりに学生たちと会った。日頃、大学で見かける彼らの顔とは違った、ちょっと羨ましくなるような、現場での制作者の顔をしていたことに驚いた。明日までに完成させるために慌ただしく各自の場に出向いて行く彼らの姿を見つつ、所在が無い私は、土井さんから地域の方々と学生の触れ合いについての話を聞いた。石川君の映像作品への高度な機材及び技術サポート、丸山君への地域住民からの資料提供、石倉さんの写真作品と場の設定からインスタレーションまで、木名瀬さんの作品への道しるべの旗製作、石井さんの竹を編む技術及び手助け、金沢美大からの参加学生稲葉君への効率よく作品を作る技術指導など、それぞれの地域で多くの人たちに支えられて作品が出来上がろうとしている状況を聞き、アート・イン・レジデンスの醍醐味を彼らが確かに味わっていることに感心した。そこで、土井さんは若い学生とやり取りする地域の方々が、若かりし頃の記憶やパワーを呼び覚ましつつ、これまでに得てきた知恵を伝える姿を見て、住民の潜在能力を改めて痛感したことを話された。私は、同時に参加学生においても、これまでの制作研究とは違った自然を相手にしたフィールド・ワークや、周辺環境の背景を意識し社会との関わりを経験することで、地域の方々と相まって、彼らの潜在能力が引き出されたことを知り、嬉しく思った。概して各学生の作品が、本人が十分満足するものになったわけではない。しかし、それぞれに確かな手応えとこれからの多くの課題を得ることが出来た、意味のあるアート・イン・レジデンスになったと言えるであろう。

最後に、彼らにこのような機会と経験を与えて頂いた土井さん、リバーパル五ヶ瀬川のスタッフ、ボランティアの方々、さらに学生と一緒に作品制作に携わって頂いたサポーターの方々など、多くの皆様に心から御礼を申し上げます。

東京藝術大学彫刻科教授  
林 武史

## 謝辞

### お世話になった方々

浅井 ミツ子	甲斐 貴子	島田 彰	東田 麻衣
浅井 美由喜	甲斐 耕一郎	島田 昭子	福良 タエ子
伊東 恭志	甲斐 砂子	白石 大佑	福良 攻治
井上 清美	甲斐 俊行	染谷 純一	福良 誠一
歌津 いつ子	甲斐 真司	染矢 義春	福良 博
歌津 京子	甲斐 辰雄	高橋 寿芳	福良 巳千子
歌津 公光	甲斐 忠男	田中 カズ子	福良 茂樹
歌津 節子	甲斐 貞巳	田中 勝美	毛利 昭嘉
梅田 稔夫	木宮 公子	田島 タチ子	毛利 洋子
尾瀧 華菜	串間 直子	田島 徳	山口 信子
小田 芳	栗田 京一	土井 裕子	山田 大志
金子 登志子	黒木 公博	中山 伸生	矢野 雅子
金子 文代	斉藤 康生	中村 浩子	矢野 純一
甲斐 ノブ子	酒井 けい子	中武 久美子	吉田 幸一
甲斐 アツ子	酒井 誠一郎	中武 八郎	吉本 恵美子
甲斐 シズ子	清水 マツ子	貫 ミネ子	渡辺 フミ子
甲斐 めぐみ	島田 克徳	貫 武	渡辺 良平

50 音順

株式会社 通信特機  
株式会社 有田生コンクリート  
ショッピングプラザわたなべ  
フォトショップB  
有限会社 ソメヤ工芸  
NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク

私たちはこの短い期間をそれぞれが作品を通じて延岡という場所、人と関れた事にアーティスト・イン・レジデンスの醍醐味を感じました。それは今後私たちが作品を作ることの根底をも改めて考えさせられるきっかけにもなりました。

今回このような機会を与えてくださったリバーパルの皆様、先生方、制作や生活の場を整え、温かく迎えてくださった地元の方々にこの場をお借りして心より御礼を申し上げます。

参加作家一同

#### ARTIST IN RESIDENCE IN NOBEOKA 2013 図録

会期	2013年10月11日(金) - 27日(日)
図録制作	石井夏実 石川洋樹 石倉未那美 木名瀬薫 丸山喬平 稲葉星舟
企画・広報	NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク リバーパル五ヶ瀬川
デザイン	石川洋樹 木名瀬薫 他
協力	東京画廊 山本豊津
賛助	井上清美 土井裕子
発行日	2014年1月末 400部限定
印刷	株式会社グラフィック